



「今、伝えたい言葉」

＝第6回日本語大賞・表彰式を開催＝

日本語の美しさや言葉のもつ力を見つめ直すことにつながるエッセーや作文に与えられる「日本語大賞」（日本語検定委員会主催）の第6回表彰式が、2月22日午後、文部科学大臣賞の受賞者4人らが出席して東京・北区の東京書籍本社ホールで行われました。

第6回のテーマは小学生、中学生、高校生、一般とも共通の「今、伝えたい言葉」。米国、中国、イタリアなど海外10カ国からの221点を含めて、小学生の部759点、中学生の部434点、高校生の部290点、一般の部211点の計1694点の応募がありました。

第1次、第2次の審査を経て、審査委員10人による最終審査が行われ、小学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、中学生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞3点、佳作5点）、高校生の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作5点）、一般の部（文部科学大臣賞1点、優秀賞2点、佳作5点）の4部門の各賞が決まりました。



この日の表彰式には▽小学生の部、神奈川県・湘南ゼミナール中川教室の小学校6年生、神部野乃子さん▽中学生の部、東京都・早稲田大学高等学院中学部2年、長南直弥さん▽高校生の部、米国シアトル日本語補習学校高等部2年、中野汀さん▽一般の部、大阪府・主婦、市川睦美さん—の文部科学大臣賞受賞者4人が全員出席し、それぞれに賞状、楯、副賞が贈られました。

表彰式は、フリーアナウンサーで審査委員の梶原しげるさんの司会で進行しました。主催者を代表してあいさつに立った梶田叡一理事長（奈良学園大学学長、聖ウルスラ学院理事長）は「言葉で工夫しないと気持ちを伝え合うことができない。読んでいて涙がでそうな作品が沢山あった」と筆者の思いがにじみでた作品が多かったことを紹介。審査委員を代表して作詞家の吉元由美さんが、文部科学大臣賞受賞作品について講評。「今、この言葉を伝えたいという思いがたくさんこもった作品ばかり。文章がうまくなるためにはテクニックも大事だが、伝えたいことがあることが大事。感動することが文章を書きたいというエネルギーになっていく」と述べ、4人の作品がいずれも光景や心情をうまく言葉で表し、日本語の魅力やその奥にある日本人の心にも思い至らせていることに賛辞を送りました。

次ページへ続く 

このあと、来賓の文部科学省民間教育事業振興室の楠目聖室長から表彰状を受け取った受賞者が自らの作品を朗読しました。



▽母親と一緒に帰省したときに、祖父が優しく教えてくれた「ごめんね」ではなく「ありがとう」の言葉で感謝の気持ちを伝えた方が、お互い笑顔で明るくなれると気付き、「ごめんね」を「ありがとう」に変えていこうと決意した、神部さんの「『ありがとう』にチェンジ！」

▽お盆で帰省した祖母の家で、朝食の準備や畑仕事を手伝いながら、人知れず家族のために苦勞を重ねてきた祖母のことを知り、祖母の心に届く言葉を探して、尊敬のニュアンスを含んだ「恐縮」と「感謝」を一言で表す方言に出逢ったときの喜びをつづった、長南さんの「もっけだの」



▽アメリカ人の父親に日本語を教えながら一つの英単語では表せない日本語に出くわしたのをきっかけに、国によって異なる自然や人々の生活と言葉の結びつきに気付き、「懐かしい」「もったいない」など日本にしかない言葉（概念）は私たちの誇れる文化で、次の世代にも伝えていきたいと結んだ、中野さんの「日本にしかない言葉」

▽子どもを連れて出掛け、突然の雨に見舞われたり、荷物とベビーカーを抱えて駅の階段を登ろうとしたりして、たくさんの人に助けってもらったときに聞いた「お互い様」の一言は、相手の申し訳なさをも相殺してくれる言葉だと気付き、互いに助け合って生きる共生社会の素晴らしさを訴えかける、市川さんの「『お互い様』のお陰様で」一の順に朗読。緊張した表情を見せながらもしっかりと口調で読み終えると、会場から大きな拍手が送られました。



梶原さんのインタビューに4人は、言葉少なながらも喜びの表情を浮かべていました。

最後に沖田庄二専務理事が閉会の辞を述べ、表彰式は約1時間で終了。ご家族や審査委員らが表彰された4人を囲んで記念撮影も行われました。

(文責：時事通信社 升谷 昇)

第6回 「日本語大賞」

